

## 大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究

—岩手県大槌町「生きた証プロジェクト」を事例として—

麦 倉 哲\*

(2015年9月30日受付, 2015年12月25日受理)

### 第1章 本論の目的と方法

#### 1 本論の目的

本論の目的は、岩手県大槌町の「生きた証プロジェクト」の到達点ならびに社会的意義について検討するものである。筆者は大災害による犠牲死者について、慰霊・鎮魂の各種式典や、や被災の検証作業、そして記録に残そうという取り組みについて、関心を持ってきた。これまで、①仮設住宅入居者調査において「慰霊・鎮魂」を通じたまちづくりについて質問したもの、また②吉里吉里地区の自主防災計画の策定の中で「犠牲となった方がたのことを考えて防災に活かす」という段階を踏んだのも、その延長線にこうしたテーマへのこだわりがあるからである。それゆえ、生きた証をのこそう(残そう、遺そう)という取り組みは、筆者自身が2011年の発災後から個人的に取り組んできたテーマである。のこそうとは、単に一般に記録を「残そう」であり、また意図して後世に託すという意味を込めて「遺そう」でもある。

ところで、このテーマは大槌町の中においても、多様な主体によって取り組まれてきたものでもある。大槌町内では町のプロジェクトとして「生きた証プロジェクト」を実行する準備が進められてきた。大槌町議会では、この案件が議題となった当初の2013年10月には賛否が分かれたものの、2014年3月には取り組みの予算が承認され、同年3月末に、生きた証プロジェクト実行委員会準備会が発足し、筆者も準備委員会委員として委嘱された。

そこで、①生きた証を残すプロジェクトがどのような経過を経たのか、②このテーマについて大槌町民のどのような期待が込められているのか、③町外から入ってきてこのテーマに関心を注ぐ人たちは何に焦点を当てているのか、さらに、たぐいまれなこのプロジェクトが地域社会の取り組みとしてどのような到達点を目指しているのかを検討したい。また、筆者自身の取り組みにより大槌町内で得られた各種データから、この地域文化の特性を明らかにし、「吊い」[死者との対話]「検証—防災」などの主に3つの面から解釈し論述したい。

#### 2 方法と展開

検討の材料とするのは、①データとして大槌町仮設住宅入居者調査(2011年、2012年、

---

\* 岩手大学教育学部

2013年、2014年)の結果、②大槌町吉里吉里地区等における犠牲者調査の結果、③筆者が、自身のプロジェクトの中で聴き取りをしたり考察をしてきた記録、そして④このテーマに関連する議論を展開している著述者・思想家・社会学者の言説である。

岩手大学が、被災の年から継続して実施している「大槌町仮設住宅入居者調査」(仮設住宅入居者を対象としてアンケート)の中で、自分たちがかかわる復興のまちづくりとして重要な点を多肢選択でうかがったところ、「交流の活性化」や「防災の文化を受け継ぐ」とならんで、「犠牲となった方がたの鎮魂・慰霊」が非常に高いという結果が出た。

大槌町「生きた証プロジェクト」が誰か個人の発案でなされたものでないことが、この調査結果の一端からうかがえる。生きた証は、甚大な被害を受けた人びとによる民衆の次元の営みであるといつてよい。

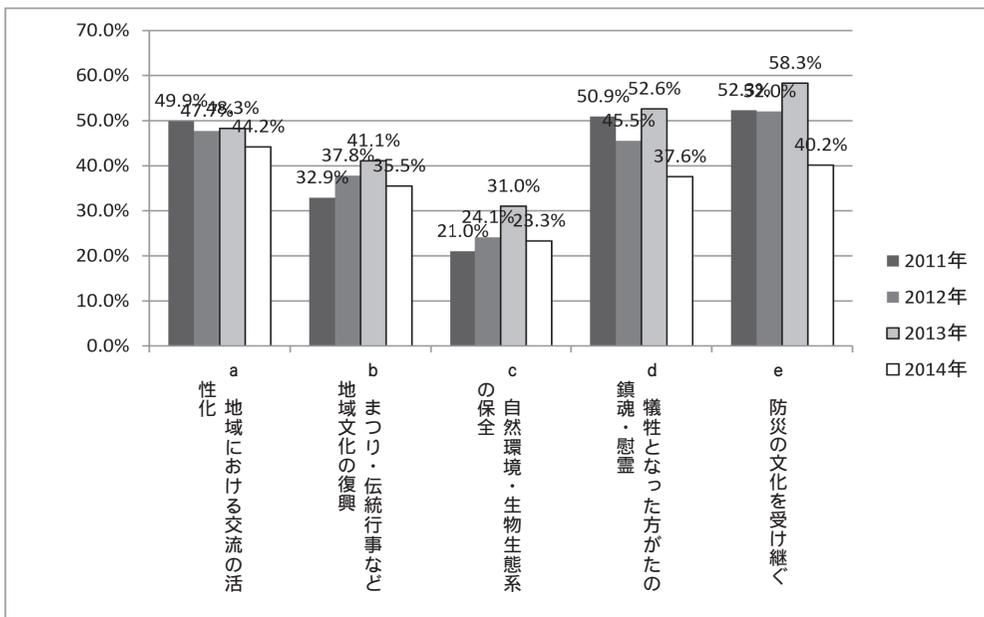


図1 自分自身に関わる復興のまちづくり  
—「大槌町仮設住宅入居者調査」(2011～2014年：岩手大学)より

次に、仕事を再開もしくは継続するかを聞いた質問では、「再開もしくは継続しない」に次いで「より多くの収入を得られること」のほか、「大槌町から通える職場であること」や「生きがいを得られること」が、大差なく続いている。収入の多さが、仕事に関するダントツの事柄ではないのである。

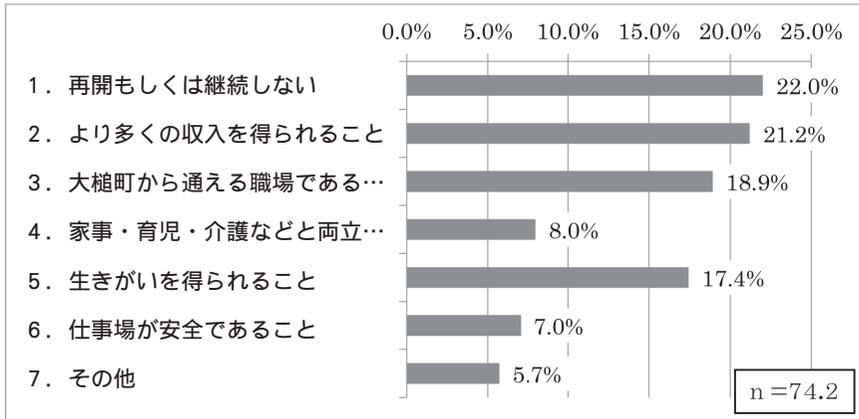


図2 仕事で重視すること (2013年)

## 第2章 生きた証をめぐる岩手県ならびに大槌町における動きの経過

### 1 多元的な発生過程

東日本大震災による被災状況の深刻さが明らかとなる中で、大槌町住民や行政の関係者の中で、たくさんの犠牲者を地区全体で、そして町全体で弔うという方向性が打ち出されてきた。

大災害犠牲者の遺族は、亡くなった家族や行方不明者の家族のことを想い、死者（もしかして死者かも知れない不明者）との対話が町内外各地で取り交わされるという状況が起こっていた。ある者は、過去の災害や戦災、過去の家族喪失体験と重ね合わせて、亡くなった方を忘れずに記録に残したいという思いを新たにしていた。

資料1に示したように、大槌町の様子に想像力を働かせた各種町内外の関係者は、2014年5月に正式発足する「大槌町生きた証プロジェクト」へと結びつくような、社会活動、取材活動、研究活動を行っていた。

生きた証プロジェクトはそうした各種関係者が集ってスタートした。たくさんの犠牲死者を出した大槌町という場に、生きた証に関する磁場が形成され、そこに引き寄せられて集ったのが生きた証プロジェクトの関係者である。生きた証プロジェクト委員会の委員の面々や、プロジェクトへの助言者など委員会関係者たちは、その全体の一部ではあるが、生きた証プロジェクトを進展させる使命を負った者たちである。生きた証プロジェクトが進展することにより、今後、非常に多くの生きた証関係者が生まれ、このプロジェクト関係者の壮大な裾野がみえてくるはずである。

#### 資料1 生きた証をめぐる岩手県・大槌町の動きの経過

##### 1 多様な人びとが同じ方向で動いている

多様な主体が、生きた証を残すという趣旨の作業に取り組んでいた。基本的に、同じ方向を向いていた。そうした主体が、大槌町の事業として取り組むことに、各方面の主体が、協力しあうところへきている。

大槌町の被災者、大槌町、地元の仏教会、戦没者遺族会、消防団、民生児童委員、町外からの動きとして、朝日新聞、岩手日報ほか、報道諸機関、防災都市計画研究所、東京大学窪田研究室、岩手大学ほか、研究諸機関、・・・。

①■前町長が立候補予定者であった時の思い

町長選挙への立候補予定者であった碓川豊は、犠牲者に思いを馳せた。亡くなった方一人ひとりの名前を刻みたい、記録を残したいというようないことであった。(2011年6月)

過去に、兵庫県神戸市の大震災犠牲者のプレートを視察し、犠牲者一人ひとりの記録を残すことへの思い入れを強くもった経験がある。

②■大槌町は合同慰霊祭を行った。2011年6月19日(日)(吉里吉里地区では、4月29日)。

碓川町長当選の以前から、大槌町および大槌町住民は、町全体で弔うという方向性を強くもっていた。

吉祥寺では、東日本大震災被災者につき戒名料は無料ときめた。

③■書家「木戸」さんのメッセージ

朝夕、黒板メッセージ 盛岡の書家・木戸さん - 【岩手日報】2011年8月6日

「どんな苦境も必ず乗り越えられる」。盛岡市西青山2丁目の書家木戸志保子さん(56)は毎日の朝夕、自宅前に取り付けた黒板に通行人や被災地へ向けたメッセージを記している。被災者や地域の人の背中を押し、内陸の人が沿岸の被災地を忘れないよう願いを込めてチョークを握る。「行方不明者や死者は数字で見るとひとまとまりだけど、亡くなった人の数だけ人生があったことを忘れてはいけない」と思いをはせる。黒板に言葉を書き始めたのは8年前。自宅前の通りを疲れた顔で歩く学生や社会人を見て、元気を届けたいと始めた。当初は「あいさつは心のリボン」など通行人へ向けたものが多かったが、震災後は、報道などで目にし、印象に残った被災地の人の言葉や、被災地へのメッセージを書くようになったという。

④■朝日新聞東野真和記者は、生きている方の生きている証、亡くなった方の生きた証の取材を、行っていた。

2011年12月9日大槌町生きた証100人の記事が出された。

⑤■大槌町は、2012年3月5日、東日本大震災犠牲者名簿(2012年2月15日現在)を公表した。氏名、年齢、住所地の町丁が記されている。

⑥■岩手日報で「忘れない」

被災後から取材をはじめ、2012年3月11日から開始された。

釜石支局畠山秀樹支局長らの取り組みは続き、大槌町関係の故人の記事がいままも少しずつ増えている。

⑦■岩手大学は

A：避難所代表者(リーダー)インタビュー調査(2011年～2012年)、B：仮設住宅入居者調査(2011年から毎年、2014年で4回目)、C：吉里吉里地区自主防災計画策定検討会への支援・事務局のかかわり(2013年～2014年継続)、その中で、吉里吉里地区の被災犠牲者すべてについて被災状況ケース調査を実施(2013年)、D：独自の「生きた証を記録する調査」を実施中。

⑧■安渡地区自主防災会議発足、2012年6月、2012年4月自主防災計画案を役場に提出

し、協議を申し入れ。(防災都市計画研究所と諸大学が支援・連携)

⑨■吉里吉里地区自主防災計画策定検討会議開始、2013年3月。2014年7月に自主防災計画案を役場に提出し、協議を申し入れ。

⑩■赤浜公民館(大槌町中央公民館赤浜分館)が東大都市デザイン室(窪田亜矢研究室)の協力をえて「3.11大地震直後の軌跡」を刊行、2013年5月。

## 2 多様な人びとが同じ方向で動いている

かくして、東日本大震災でとくに厳しい現実におかれた大槌町は、そのことが一つの契機となって、亡くなった方への思いを寄せる内外の人びとを結集させる磁場が形成されているようだ。多様な主体が、生きた証を残すという趣旨の作業に取り組んでいた。基本的に、同じ方向を向いていた。そうした主体が各方面から寄り集まっていたのが大槌町であり、大槌町が事業として取り組むという段になって、協力しあうところへたどり着いたとみられる。大槌町、釜石仏教会、朝日新聞、岩手日報、岩手大学麦倉研究室、防災都市計画研究所、東京大学窪田研究室などなど、である。

## 第3章 プロジェクト基本事項決定の経過

### 1 議会決定と準備委員会

大槌町では、2014年3月に、生きた証プロジェクトの実施について議会で決定し、さっそくその実施準備のための生きた証プロジェクト実施の準備委員会の会合を開いた。行政と議会のみならず、町内外の幅広い取り組みとする第一歩が築かれた。

### 2 生きた証プロジェクト実行委員会準備・着手

こうして開かれた準備会(2014年3月)に続いて、2014年度の第1回委員会が開かれた(同年5月)。第一回で重要と思われたのは、①ご遺族の心情を傷つけないこと、②誰かの責任追及になるとかのトラブルを助長しないことである。一方で、「故人の人となりを知りたい、のこしたい」と「この結果を被災の検証に生かしたい」との二つのどちらを強調するかにより微妙な意見の幅もみられた。

検証がトラブルを助長するのではという危惧については、工夫ができる。検証のためには、被災の事実をたんと記述することである。故人の人となりを記録することについては、家族など身内の内部の事柄ではないかという違和感を持つ人もみられるが、故人の人柄も含めて町全体で弔うこと、町全体で記憶にのこすという方向で、理解されるように進められた。生前に、故人を知ることのなかった方がたか、故人のことについて、追想する機会をつくることになるからであり、その点の意義も小さくないと思われるからである。

### 3 2014年9月6日大槌町生きた証プロジェクトシンポジウムより

大槌町長は、記念すべき第1回シンポジウムの挨拶に立って「町民全体で将来へ引き継いでいく必要があるのではないかとの思いで企画したプロジェクトです。また、ご遺族の皆様方の辛く悲しい思いが消えないのも承知しております。しかし、震災の犠牲になられた皆様が一生懸命働いたり、夢中で夢を追いかけたりした背景を生きた証としてのこし、後世に伝えていく

ことは、自分のためでもあり、家族、友人のためでもあると思います。このプロジェクトは、不条理に死を迎えた方、突然生を奪われた方がたを供養するためのプロジェクトです」と述べた。

次に、山折哲雄は、特別講演「鎮魂の対話」において、「我々の社会に根付いた希望の光、可能性というものを、この災害体験の中から拾いあげ見つけ出し、それを記録し次の世代へとつなげていく、これが一つの重要な仕事ではないのか。そして、その宗教性、倫理性という先祖から伝えられた生き方、暮らし方に、命を吹き込むのが死者の魂との対話である。供養して対話を重ねること、これは時間がかかるかもしれませんが、そう思うのであります」と述べた。

三番目に、プロジェクト実行委員会委員長で吉祥寺住職の高橋英悟は「生きた証プロジェクトは、ご戒名をつける時と同じだと思っています。お亡くなりになった方の生前の好きなことなどをお聞きして戒名を決めるからです」と述べた。

さらに、プロジェクト助言者で防災都市計画研究所の吉川所長は「私の勝手な思いですが、無念の死を迎えた方がたは、自分の死を防災に役立ててほしいときっと思っているはずですよ。お話をうかがって防災に役立て、同じ災害を繰り返さないようにしたいと思っています」と述べた。同じく助言者で岩手日報釜石支局長（当時）の畠山秀樹は、「(岩手) 日報の『忘れない』の企画が生きた証と共通の企画内容だと思っています。大槌は、1,284人中702人掲載させていただきました。また、1,234人のうち90人を残してご遺族とお話をさせていただきました。一人ひとりの犠牲者にスポットをあてることにより命の尊厳を守ることになるのではないかと考えております」と述べた。また、同じく助言者の朝日新聞編集委員の東野真和は「大槌町に来るきっかけは、町長が亡くなりこれからどうやって復興していくのかをこの目で見てみたいと思ったからです。・・・しかし、町民の皆様一人ひとりにお話をうかがうと本当に辛い思いをされてきたことを実感します。このプロジェクトは、大切なプロジェクトだと思います。知らない人がいたらぜひ教えてほしいと願っております」と述べた。

最後に司会の岩手大学教育学部、地域防災研究センター教授麦倉哲は「このプロジェクトにきわめて重要な意義があるといったところで、それだけで進むわけではありません。ご遺族、関係者のみなさま一人ひとりのご理解とご協力があってこそであり、このプロジェクトに意義があり意味があることの共通認識がえられてからの話です。プロジェクトの調査員がご遺族・関係者のところへうかがいますが、その前提は信頼関係です。調査者もご遺族・関係者も同じ目線で対話し始めることが、プロジェクトの第一歩だと思います」とまとめた。

#### 4 2014年度第2回実行委員会（2014年10月）

2014年10月実行委員会では、生きた証の聴き取りの体制が提案される。聴き取り内容（質問項目、調査票）、調査方法も、そして、受託責任者・地区の責任者と、専門調査員、(水先) 案内人、地元調査員との連携についての流れ図や組織図も確認された。実際に、どの故人のことについては、誰にうかがったらよいかについては、専門調査員と案内人・地元調査員が話し合っ調整することなども確認された。

### 第4章 生きた証をのこすためのこれまでの取り組み

大災害等の時に、生きた証をのこす取り組みは、20世紀以降の日本に限ると、太平洋戦争

大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究

戦没者や阪神淡路大地震犠牲者についての取り組みに、具体例を見出すことができる。

まず犠牲者を数として残すか、一人ひとりの名で残すかどうかで、生きた証プロジェクトと同じ方向にあるかがうかがえる。次に、犠牲者の名簿を残すか、慰霊碑等の記念碑やプレートにその名を刻み込むかである。太平洋戦争でたくさんの犠牲者を出した、沖縄県内の各自治体が建てる慰霊碑には、犠牲者一人ひとりの名前を刻んでいることが多い。阪神淡路大震災において、兵庫県神戸市は、被災から丸5年後の時期に、慰霊のネームプレートを完成させた。ネームプレートが設置された神戸市役所にほど近い神戸市市立東遊園地内の慰霊の場所へは、開設以来、たくさんの震災遺族や関係者、そして県内外からの一般の人びとが訪れるようになった。祈りの場所となっているのである。

神戸大学近藤民代は学生時代に自ら大震災の経験をし、被災後3年目から、震災犠牲者の人生史を記録にのこそうと聴取りを開始している。被災から20年、開始してから17年、その活動はいまも続いている。神戸大学・都市安全研究センターの室崎益輝教授、工学部の塩崎賢明教授らでつくる「震災犠牲者聞き語り調査会」では、1999年から10年計画で聴き取り調査を実施し、その記録は人と防災未来センターで所蔵している。

2004年のクリスマスの時期にスマトラ沖地震が発生し、大津波の発生により非常に多くの人びとが犠牲となった。甚大な被害を経験した数多くの地区のなかで、インドネシア・バンドアチェ州では被災後、全世界から災害関係の研究者が入って数々の研究が進められている。そして、バンドアチェ州の地区全体でも、防災への熱心な取り組みを進めている。阪神淡路大震災を経験した日本は、災害や防災の研究のアジアの拠点であり、災害研究交流のために、数多くのアジアからの研究者や大学院生が日本を訪れている。

こうした研究交流の中で、インドネシアにおいて津波の犠牲者のことがどのように扱われているかがったところ、一般の死者についても家族・親戚、近隣など共同体で弔うのが普通であるが、戦争や災害で亡くなった方はさらに特別な扱いを受ける。そうした死が、共同体社会の成員一般にとって、共有すべき意味があるからである。そうした死の意味を社会の全体で受け止めているそうである。宗教を超えて、大災害の死者が特別な意味をもつことが確認できる。

表1 阪神淡路大震災関連の慰霊碑

自治体／地区	内容
旧北淡町（現淡路市に合併）：「北淡震災記念公園」断層をそのまま残す。この公園、慰霊碑がつけられた。	慰霊碑には阪神淡路大震災で亡くなった40名の名前が刻まれている。平成11年4月建立。
宝島池公園（東灘区）	石碑ではなく、奉書
本山第三小学校	児童6名の名前
中野北公園	東灘区本山中町1～3丁目の犠牲者75名の名前
中之町公園	田中町1～5丁目、甲南町2～4丁目の犠牲者133名の名前
求女塚東公園	住之江区内の犠牲者40名の名前
弓絃羽神社	氏子住民、周辺10地区の130名の名前

\*早稲田大学川副早央里の調査による

第5章 被災4年間で筆者が会ってきたご遺族から

1 復興は単線ではなく

被災4年間で筆者が会ってきたご遺族との対面経験からまず言えることは、大槌町には、共同で死を弔う文化が根強くあるということである。多くの犠牲者を出したことが共同体験であったからである。住民自ら取り組む復興の課題の中に、犠牲となった方がたへの鎮魂・慰霊があり、そうしたまちづくりへの関心は総じて高い。津波被災から、救援救助、捜索・身元調査においても、警察、消防隊、自衛隊だけではなく、住民の一部が関わってきた。亡くなった状況は、近隣や地域の人びととの共同的対処の一環であった。

復興とは何かを考える時に、その根幹の一つは、地域社会が持続的である状態へと至ること、力を回復すること、個々人の生活が持続可能である状態へと至ること、そして持続的な力を回復することである。それゆえ、しばしば発される「復興が遅れている」という発話も、多面的に考える必要がある。

心の復興の現状は、おしなべて順風満帆ではない。精神面での復興に時間がかかり、受けたダメージはそう回復するものではないからである。それゆえ、心の復興の難しさは、こうした面での支援が必要であるという提言にも結びつくものである。時間がかかるから問題という論点もあるが、他方で、復興には時間がかかるものだ、大いに時間をかけて事態に向き合い続けることを通してこそ、向かうべき復興や、持続性の姿がみえてくるという面もある。

2 精神の復興と生活の再建

精神の復興がまだまだという状況の背景には、「こころの復興」という面ととくに物質的な面での「生活の再建」の両面が含まれている。

こころの平穏の現状について、岩手大学の仮設住宅調査は、被災後の2012年から2015年まで毎年実施している。それによると、被災者の心の状態が「平穏になりつつある」という比率は、ある程度以上は伸びない。被災後に変わってしまった現実と向き合う被災者は、以後は大きく「変わらない」現実と向き合っている感が強い。

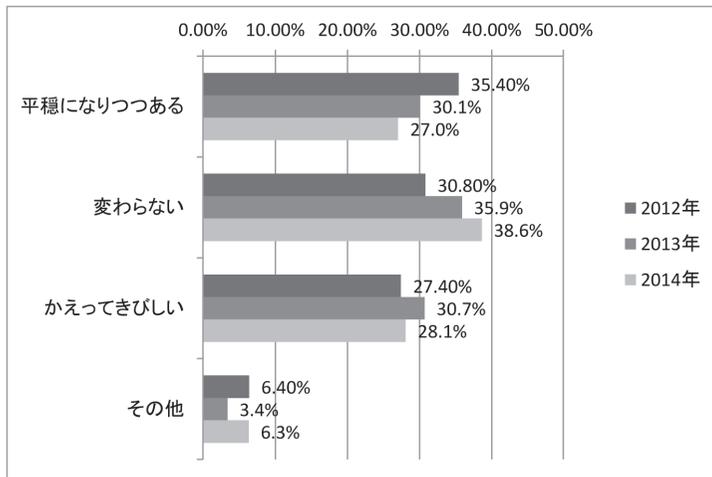


図3 こころの平穏について 一大槌町仮設住宅調査結果より

一方、主として物質的な生活面における困難さも、さして軽減されることはない。仮設住宅調査からは、被災前から生計面で苦しいという対象層が3割、被災後のいまが苦しいという世帯は、5割以上にも及ぶ。心の平穏と暮らしのきびしさとは、かなりの程度連動しているのので、生活の厳しさの打開が、精神の厳しさを軽減させることにもつながる。

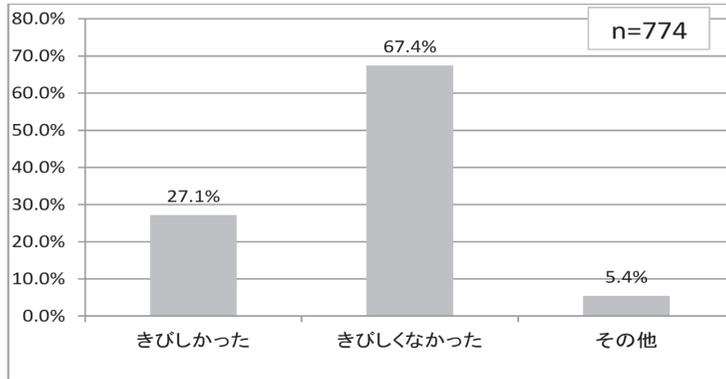


図4 被災前の生活のきびしさ ー大槌町仮設住宅調査（2014年）結果より

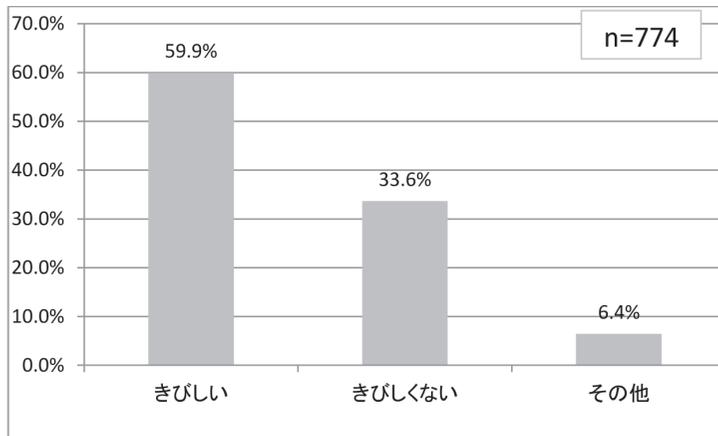


図5 被災後の生活のきびしさ ー大槌町仮設住宅調査（2014年）結果より

### 3 生きた証プロジェクトにより派生する多様な相互行為

被災後の生計のきびしさを抱えながらも、家族を亡くしたご遺族は、変わってしまった現実と向き合い続けている。その不可欠な一面として、故人の生きた証と、いまを生きる個々人の生きている証が重なる。生きた証をのこそうという諸々の取り組みは、生と死の対話のすき間に入り込もうとしている。それが、被災後の現実を生きる個々人の心の重荷に、ある程度寄り添うものであるともいえる。しかしながらこれも、個々人の今の受け止め方にもよって違いがあり、多様であることを受け止めておく必要がある。

生きた証をのこす取り組みの意味を、筆者なりに整理し意義づけると、表2のようになる。第一に、①忘れないであり、第二に、②とむらうであり、第三に、③受け継ぐである。「忘れない」

とは、故人の人生を記録する（故人の略史。故人にとって価値のあるドキュメント、遺族や関係者からの思い出）ことであり、故人が残したものを収集・整理することへと連なる。故人の略歴を遺族から聴き取り、故人との思い出や故人の特記事項を遺族や近い関係者から聴き取ることである。「とむらう」とは、故人との（故人へ言葉を送る・贈る、モノを供える、夢にみる、慰霊碑・記念誌をつくるなどを通した）相互行為に着目することであり、故人へ送る・贈る言葉、供えるモノを、遺族・関係者から聴き取り、故人のことについて夢見ることをうかがい、慰霊碑・記念誌をつくって故人を弔うことなどをうかがうことであり、これらはすべて、死者との個人的あるいは集合的な相互行為である。「受け継ぐ」とは、故人の遺志をつぐ、故人の死亡状況を検証するなどが含まれる。受け継ぐ（そして引き継ぐ）とは、故人の遺志について受け止めていることを聴き取り継承することであり、また故人の死亡状況を調査し、死亡の要因・社会的脆弱性を検証することであり、その結果、災害の教訓を引き出し後世に残す（遺す）ことである。

表2 生きた証プロジェクトにより派生する多様な相互行為

基本コンセプト	展開	多様な次元のパーソナルな・集合的なコミュニケーション（相互行為）
① 忘れない	人生を記録する（故人の略史。故人にとって価値のあるドキュメント、遺族・関係者からの思い出）。	故人が残したものを収集・整理。故人の略歴を遺族から聴き取り。故人との思い出や故人の特記事項を遺族や近い関係者から聴き取り。
② とむらう（送る・贈る）	故人との（故人へ送る・贈る言葉、供えるモノ、夢にみる、慰霊碑・記念誌をつくる）相互行為に着目する。	故人を送る・故人へ贈る言葉を、遺族・関係者から聴き取り、供えるモノや故人のことについて夢見ることを聴き取り。慰霊碑・記念誌をつくって故人を弔う。これらは、死者との個人的あるいは集合的な相互行為である。
③ 受け継ぐ（引き継ぐ）	故人の遺志をつぐ。故人の死亡状況を検証する。災害の教訓とする。	故人の遺志について受け止めていることを聞き取る。故人の死亡状況を調査し、死亡の要因・社会的脆弱性を検証する。災害の教訓を引き出し後世に残す。

## 第6章 被災から4年間に筆者が出会ったケース

### 1 多様な展開、ケース聴き取りから（主に麦倉の被災者ご遺族や関係者との相互行為の経験から）

筆者自身が、被災から5年の間に、生きた証のテーマを心中に据えて出会った方がたについて想起すると、故人と遺族との相互行為の中から、様々な意味が作られ派生していることがうかがえる。その中で、筆者が受け止めた印象や意味づけを、ここでは5つに分類して、考えてみたい。ある意味でいちばん印象を残るのが「辞退—保留のケース」である、調査者の筆者らとの共同作業で記録をのこそうという営為について、否定的な立場を取ったり、趣旨にはしばしば賛同したりするものの、現状では発話できない方のことである。こうした方がたは、共同作業には、忌避的であったり留保的であったりするものの、なくなった故人との相互行為を続けている方がたでもある。

次の3つは、生きた証をのこす意味の3つのうちのいずれか1つを強調して分類したもので

ある。本来、以下のように簡単には分類できないが、多様なケースを紹介する意味で、便宜的に特徴づけて仕分けてみたものである。最後の1つは、故人との対話で派生する様ざまな意味や効果について考えさせられるタイプである。以上の5分類ははなはだ便宜的で、今後さらに検討を要する課題である。

表3 出会った方の5分類

5つの分類
1 辞退 - 保留のケース
2 忘れない - 忘れられたくない(そばにいる)、の点で印象に残るケース
3 吊う(送る・贈る) - 送られる・贈られる(お返しする)、の点で印象に残るケース
4 受け継ぐ(引き継ぐ) - 見守る(風をおくる)、の点で印象に残るケース
5 派生する多様な意味と効果を考えさせられるケース

## 2 辞退 - 保留のケース

このケースには、A：やり方に意見を言いたいケース、B：意義を認めない、理解しがたいケース、C：今はそういう気になれないケースなどが含まれる。

ケースC:(息子をなくした)父親は、悲しみをつづる。毎日まいにち、思い起こして起こして、毎日日記につづる。「忘れないために、記憶に残しておくために。毎日、日記に書いてきたんだよね。あれで、人生はすっかり変わっちゃったんだよね」と、悲しみに浸っていた。

息子が殉職で勇敢だって言われたって、なんの慰めにもならない。なぜ犠牲にならなければならなかったのかについて、怒りたい気持ちもあり、その気持ちは5年たっても癒されることはない。どう言っているのか、あまり言いたくなかったけれどいいことはある。

ご遺族の中には、記念の冊子として収録されるのには、今はまだ抵抗がある方も少なくない。そうした中でも、遺された家族と、故人との対話は続いているし、筆者はまた会いに行く。筆者は、生前に対面したことがない故人と死後の知り合いになろうとする。故人と遺族と筆者との3者のコミュニケーションが継続する。

## 3 忘れない - 忘れられたくない(そばにいる)、の点で印象に残るケース

このケースには、D：不思議な経験をした、夫に感謝しているケース、60歳代女性(夫と夫の姉をなくす)。E：最愛の妻をなくした、40歳代男性と子どもたち(妻をなくす)のケースなどが含まれる。

ケースD：妻の話しと思い出：「1962年にお見合いで結婚した。家には9人の家族がいて、嫁入り後は休みなく家事・育児・介護につとめた。お父さん(夫)はやさしい人で夫婦仲はよかった。どこに行くにも、お父さんが助手席に乗った。津波が来る前に夫が言った。「すっかり、家族のみんなみらせて、苦労かけたな」と。それが不思議だった。大型船の機関長をしていたので、三崎にも、釧路、多賀城にも迎えに行った、それが旅行だった。

「いまで思えば、夫の人柄でみんなからよくしてもらっているんだなあ。被災1年後、仮設住宅でひとりで寝ていると、浜の匂いがしてきたと思ったら夫が立っていた。夫が夢で会いに来たのだろうと思う」

ケースE：妻（仮にEさん）は、地震のあと、実家の母のところ、町方（町の中心部）のほうへと向かった。大地震があっても、認知症の母が一人で逃げられないとわかっていたから心配で向かった。そこで被災した。子どもたちは悲しみが癒えない。なんでおばあちゃんのところへ向かったの、私たち（子どもたち）のことよりも、そっちへ行ったのって。（息子たちへの愛情が深いのは分かっているのだろう。それでも実母のところへ行こうとするもので、はかりにかけているわけではない。）

こんな嫁はいないと思うんですよ。Eさんといっしょだから、これまでずっとやってこれたんだと思う。自分は（妻は生涯）Eさんでいいと思っているんです。妻がみつからないので、必死でさがしたんです。そしたら、妻の車が見つかって、その車の中に骨のかたまりのような、力を入れたらこなごなの灰になってしまうような塊があったんです。それを警察にもって行って、これが妻ではないといったんですけども、灰のかたまりでは、身元確認にはならない、鑑定はできないといわれて、妻は行方不明のままなんです。でも、あれがぜったい妻の遺骨だと思って、壺にいれたんです。以前にお寺の住職さんから、お金があるなら、生きている人のためにまず使ってください。お墓を建てるのに急ぐことはないですよ、とわれたんです。でも、お墓を建てたんです。こういうかたちで人に話すのも最後だと思ってインタビューに応じました、とも。

#### 4 送る・贈る — 送られる・贈られる（お返しする）、の点で印象に残るケース

このケースとしては、F：悲しみ続けている自分を励ましにきてくれた70歳代（夫と娘をなくす）の女性、G：お母さんへ気持ちを伝えたい40歳代男性（母をなくす）を紹介したい。

ケースG：＜母親孝行しようと思ってふるさとに帰って来たのに＞、地震の時に、母と一緒に家にいた。高台の家なんで、ここまで津波がくるとは思わなかった。地震のあと家のまわりを出入りしていると、つなみがおしよせてくるのがみえた。おふくろに、来るぞ、逃げるぞって言って、波が入ってきた瞬間、息を吸い込めって言った。自分では意外と冷静だったと思っている。映画のポセイドンアドベンチャーのシーンが浮かんだ。海に沈むシーンで、その通りやればいいんだと自分に言いきかせた。母の手は離さなかった。波が入ってきて、水の勢いで、家からおしながされる。その時に、自分のからだか、玄関のかもいにつかえた、それで顔をあげられない。自分はこれで死ぬと思った。でも、母と手をつないでいると母も死ぬと思い、手を放し母を玄関から押し出した。その時は、助かってくれて思いだった。母を送り出したあとに、自分もちからいっばい力をいれると、かもいがはずれた。そして、自分も流されていった。しばらくして水面から顔を上げて、母を探すと見あたらない。近くの水の中を探すと、母が見つかった、背の立たない深さのなかで、母を引き揚げ、背が立たないので、背中をたたいて、水を吐いてくれ、吐いてくれ、気をとりもどしてくれとたたきつづけた。（寒い水の中である。）それをみていた地元の人が消防団の人が「もうやめろ、やめて上がってこい」と叫んだ。それで、あきらめて流れた家の屋根にのぼった。のぼって海をながめていた。なんか、しばらくながめていた。するとまた、地元の人が、もう上がってこいて。翌日、現場の近くで母を探し、収容してもらった。

#### 5 引き継ぐ — 見守る（風をおくる）、の点で印象に残るケース

このケースとしては、H：これからは妻への懺悔の人生という60歳代男性（妻と母をなく

す)、I:写真を撮り続けている60歳代女性(兄二人をなくす、震災後に病死した母も関連死に含まれてよいケース)、J:その他・・・息子たちにわびたケース(80歳代男性)が含まれる。

ケースJ:大地震が起きて、自分が園長をつとめる保育園のことが気になった。妻には「家で待ってろよ」と言い残し、園児を避難させ、施設の点検などした。大津波が押し寄せて、妻が流された。妻は津波に流される前に逃げなかった。助かった近所の人によれば、家の中を出たり入ったりしていたという。自分が待っているよといったばかりに、家から離れなかったのだ。自分を待っていて被災したのだ。夫婦仲はとてもよく、二人で、大正琴のサークルを結成し、演奏会をかねて旅行に行ったり、地元の正月の行事にはみなで演奏したりした。当時は、それが公民館の正月の呼び物だった。長年の功績がみとめられて、大正琴の会は、表彰された。震災の前年の秋も、表彰された。それが、二人で受けた最後の表彰であり、最後の温泉旅行になった。息子たちに、「母さんを死なせてしまった。すまなかった」と詫びた。そしたら息子が、こういうことだから仕方ないよって言ってくれた。

## 6 聴くことがもたらす一定の効果

このタイプには、K:泣くなど家族から言われるケース、L:故人と向き合っているのか自問自答しているケース、M:災害体験の語り部を続けたいケース、N:地元の消防団が助けようとしてくれたケースが含まれる。

ケースK:50歳代女性(夫の母と父をなくす)。おじいちゃんがこっちから逃げて、おばあちゃんが通りへ出て、遺族を含めて3人が津波に流された。その前に、一人の従業員はすぐに実家へ、もう一人の従業員は、子どもたちと一緒に逃げて従業員は無事であった。しかしこの方は、おばあちゃんの手をつないで、しかしずっとつないでいることはできなくて離れたという。そのことを自責の念に抱いて、以来ずっと自分で背負っている。夫は泣くなどという。夫にしてみれば、妻を悲しませたくない気持ちが、泣くなどという言葉になってしまう。しかしながら、泣きたい気持ちをがまんしなければならないことが、またつらいのだろうと、筆者は拝察する。

## 第7章 結論

### 1 すべては対話

聴き取りへの着手は、死者との対話を知る契機となる。しかし、当事者のあいだでは、普通に自然と、対話は起こっており進行している。そのことが、現在の、日常生活や、今後の生活の展望にも一定の作用をもたらす、影響を与えている。このこと自体は自然で、普通で、避けられないものであろう。そうした事態は、個人や、各次元の集団や、地域社会の広い範囲で進行し、取り交わされ、今日も絶えることなく、連綿と続いている。

しかし、新たな人(人たちが)がこの事態に参集し、この(近い人の)死と向き合うことになるかもしれない。このことが、当人の精神作用に多大な影響を及ぼすこともあるし、ある程度は影響し、さまざまな日常生活の一部として保持されたり、何かと融合していくかもしれない。

個々人が死と向き合うことは、周囲の関係者との相互行為を伴うことがしばしばであり、また不可欠でもある。今を生きる自分と生きる側でつながる人との相互行為は、死者を取り巻いて、三極化・四極化していく。

心の復興の現状は、生活のきびしさと高い相関関係を示すが、生活のきびしさを反映しつつ、

精神生活の向かう先にそれ相応の影響を及ぼす。激しい悲しみや喪失といった課題に直面し、死と向き合い続けている精神生活の現状が、少なからぬ遺族にはあるのではないだろうか。このことが示唆するのは、起こったことをさっさと忘れるのではなく、それと一定の程度、納得へといたる時点まで、場合によっては延々と、向き合い続けることではないだろうか。

大槌町は、被災自治体の中で最も、行方不明者の住民比率が高い。行方不明者の遺族や近い関係者たちは、常日頃から、故人のことを片時も忘れることがないかもしれないし、だから、それを紛らしたり、それに向き合う営みを続けつつも、さまざまな反応を呼び起こすかもしれない。「悲しむ姿をみたくないし、みられたくない」というようなある種の自制も、周囲への適応も求められるかもしれない。そういったことも含めて、相互行為や三者間の行為が展開されている。第3者が参入することにより、第3者自身も、死者との対話そのものなかに今を生きる上での価値を見出すことができるからである。

生きた証プロジェクトは、この対象地で取り交わされている死者との対話、すなわち死者と向き合う相互行為を理解し、場合によってはその中に割り込み入って行き、さらにはそこに身を置き、そのことでまた、一定の相互行為に一定の作用をあたえ相互行為を刺激する取り組みである。そのように形成された磁場では、死と向き合っている人が多い、大多数と言っても過言ではない。それゆえ、そうした場面に参入することは、決して忌避されることではない、というのが現状である。

麦倉のこれまでの経験では、関係の拒絶は、いまのところみられない。とはいえ、このような趣旨で、記録をつくる作業に、意義をみとめる当事者的な共同作業に乗り出したいと思う気持ちになるとは限らない。辞退も、保留も少なくないともいえる（岩手日報「忘れない」で掲載率は5割強）。お話をうかがった範囲では、聴き取りアプローチ後にはすぐにはいれないケースは、辞退というよりも保留が多い。

向き合うことに忌避的な反応もあるが、筆者がそのことをうかがっているうちに、これが単に、自分とは違う外部の人の何かに利用されるだけのものだとはたぶん思えず、聴き取りにただちに応ずるかどうかのことで、両者がずいぶんと話し込む。むしろ、すんなり受け入れる方よりも、迷いのある方のほうが多くの時間をかけて話し込みことが少なくない。他の調査と同様に、調査拒否も、ある種の、調査への回答である。調査の場面では、その拒否や辞退の考えをよくよくうかがうこともあるが、この生きた証の聴き取りでは、そのことも、まさに、死と向き合うことについての反応であることは間違いない。だから、普通の調査とは違った調査経験を今まさにしているのである。調査結果を分析するのみではなく、調査のプロセスに出てくるあらゆる反応も、死と向き合うテーマについて考える材料となる。

生きた証のプロジェクトは、ここで展開されている死と向き合う営為とは、

- ①ある程度、内輪の人間のようにして入って行くことであり
- ②そのことで、この相互行為の意味を解明し、その世界を明らかにし、
- ③生きた証の残す作業としての共同の製作物を作成することであり、
- ④さらに、そうした相互行為がもつ、そして被災地の日常世界がもつ、社会的価値、文化的価値を、他と比較考察し、発信していくことにつながる。

経済、産業や、物質や、コンクリートの復興とは違う角度からの復興や今を生きている文化、精神文化の価値を再確認することになり、とにかく元へ戻りたい、物質的に豊かになりたい、果敢に協働社会を生き抜きたい、再稼働させとにかく動いていたモノは動かしたい、というの

とは別の世界が展開しているのだということの価値を見出したい。

何かを動かしたい、活性化させたいという邁進が、ある部分で、自分自身が自然と向き合うことを余儀なくされていることに対して、思考停止をうながすことにもなるからである。

これは、宗教や哲学のテーマかも知れないが、社会学のとりわけの存在理由がまさに発揮される主題である。理論的な考察の境地もさることながら、こうした深いフィールドワークを通しての実証データや、社会的活動事例を通して、社会を省察し、また展望するところにも、社会学の真髄はあるのではないだろうか。

## 2 大震災がもたらした社会変革・覚醒効果

人は死者と対話する。いまを生きる人びとの営みの一部に、死者を思うことが含まれている。このことは人間にとって、時代・文化を超えて普遍的なものである。家族の一員が病に倒れ亡くなっていくような場合を例にとっても、亡くなった故人と、それを見送った家族とあいだには、死をめぐる対話が、大なり小なり繰り広げられることは、容易に想像がつく。

大災害などでたくさんの方が亡くなった場合には、こうした死者との対話は、端的に言えば、家族・親戚や近隣を超えて、いわば町じゅうで頻繁に繰り広げられることになる。それだけ多くの犠牲者があったことが全体社会にとっても一大事なので、多くの犠牲が出たということの事態を、社会の全体が受け止め、社会全体で対応しようとするのである。こうして大災害の場合は、死者との対話は、幅広い社会的な現象となる。

東日本大震災がなぜ全世界的にもとりわけ注目されるのかといえ、このような大量の犠牲者を出したということが、先進国の中では、きわめて異例だからである。近代化以降の日本の歴史においても、このようなたくさんの犠牲に思いをはせるのは、明治三陸大地震、関東大震災、太平洋戦争など、史上まれにみる災害にさかのぼらなければならない。

大災害は、社会が直面する問題状況を映し出し、社会の転換期を形成する。その災害により、社会はある種の方向転換を余儀なくされる。大災害の結果として、その社会は大いなる転換期を迎えたことが、後の時代からみると、よくわかることになる。

①関東大震災では、都市計画の意義・重要性が覚醒され、②太平洋戦争の敗戦後は、平和への希求・戦争の放棄が刻印され、③阪神淡路大震災では、ボランティア元年ということが注目された。そして日本は、とりわけ三陸の当事者は、④東日本大震災（及び原発事故）を経験した。東日本大震災で、社会が注目したのは何だろうか、現在はその答え探しが続いている。しかし確実に言えることは、「死者との対話」が、大災害を受けての重要テーマの一つとなっているということだ。最大のテーマと言えるのではないかと、実は思えるのである。

過去の大災害は、社会の転換を促した。そして、東日本大震災及び原発事故は、死者との対話を劇的に促すことになった。このことは日本社会の趨勢に、非常に大きな一石を投じている。大震災によるたくさんの死は、現代の日本が、あるいは世界じゅうが追い求めてきた豊かさの一面に問い直しを求めているともいえる。ものの豊かさ本位の世情への問い直しは、被災地の心の奥底に進んでいるのではないか。

復興において、①基盤整備や②住宅再建、③産業の復興とならんで、④心の復興や、精神のケア・復興の重要性が叫ばれる。その精神の復興の中の重要な部分に、「死者との対話」が含まれるであろう。「生きた証プロジェクト」は、このような社会全体の新たな胎動と連動するものである。他の分野の復興の諸事業や諸活動とならんで、生きた証への取り組みは、重要な

位置を占めるのである。

生きた証プロジェクトの取り組みは、こうした営みを通じて「生命の持つ重み」について、世界じゅうの人びとに幅広く感動をうながすに違いない。これこそ「死者との対話」がもつ重大なインパクトである。一人ひとりの死と向き合うということこそが人類・社会の原点であるにも関わらず、その営みのもつ意味や意義が、おろそかになっているかも知れない世界に、大いなる一石を投じることになるからである。

人はいつしか、「人の死」よりも「経済の損失」を気に掛けるようになり、何かの目的であれば「人の犠牲」をも肯定するようになり、文明の度合いにより「命の格差」があることを当たり前のように入力してしまったのではない。「死者との対話」は誰かに利益をもたらすものではない。誰かの目的を実現するものでもない。「死者との対話」や「生きた証をのこす」取り組みそのものが、価値をもつものだからである。

生きた証プロジェクトと関係する関心は、大槌町のみならず岩手県内の被災と各地で総じて高いとみられる。そして大槌町においても、災害によって犠牲となった方の記録を残そうという取り組みは、町内からも町外からも、たくさんの思いが引き寄せられ、多様な活動が展開されている。被災後の大槌町において形成された磁場が、非常に多くの多様な立場の人びとを巻き込んでいる。多様な当事者による、「死者との対話」が展開している。このプロジェクトは、そうした諸現象や諸活動を、意識して、一つにまとめあげようとするものである。

生きた証を残そうという取り組みは、多様な人びとの多様な思いと関わりから展開されてきたといえる。犠牲者のことを思う遺族や近親者は、死者との対話を続けている。このコミュニケーションの相互作用が、地域のまちづくりや持続性や活性化に影響を及ぼす可能性がある。相互的な関係として、①忘れない — 忘れられたくない（そばにいる）、②送る・贈る — 送られる・贈られる（お返しする）、③引き継ぐ — 見守る（風をおくる）、④まちがつづく、魂があらたな生をえる（まちに戻ってくる）などの相互作用が営まれているのではないか。この論について、弔いの社会学、死の社会学、死者との対話など、これまでの社会学的な知見を集めて、さらに検討を続けたい。

## 参考文献

- 1) 麦倉哲・飯坂正弘・梶原昌五・飯塚薫「大震災被災地域にみられた救援・助け合い文化」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第12号、岩手大学教育学部：pp15-28、2013。
- 2) 麦倉哲「東日本大震災の被災から復興における「脆弱性」と「社会階層」—暮らしの面と心の平穏の面に焦点を当てて」『理論と方法』Vol.28,No.2、数理社会学会：pp269-288、2013。
- 3) 麦倉哲・吉野英岐「岩手県における復興プロセスと課題」『社会学評論』（特集号 東日本大震災3年目のフィールドから）64（3）、日本社会学会：pp402-419、2013。
- 4) 岩手大学教育学部社会学研究室『岩手県大槌町2011年仮設住宅調査報告書』、岩手大学社会学研究室、2013。
- 5) 岩手大学教育学部社会学研究室『<2012年調査>岩手県大槌町仮設住宅調査結果概要版』、岩手大学教育学部社会学研究室、2013。
- 6) 岩手大学教育学部社会学研究室『<2013年調査>岩手県大槌町仮設住宅調査結果概要版』、岩手大学

## 大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究

教育学部社会学研究室、2013。

- 7) 岩手大学教育学部社会学研究室『岩手県大槌町避難所調査報告書』岩手大学教育学部社会学研究室、2013。
- 8) 麦倉哲・梶原昌五・高松洋子・和田風人「Arc-gisを用いた津波避難行動の検証—岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として」『日本都市学会年報』Vol.47、日本都市学会：pp317-324、2014。
- 9) 麦倉哲・梶原昌五・高松洋子・和田風人「東日本大震災犠牲者の被災要因からみた「地域防災の課題」—大槌町吉里吉里地区自主防災検討のための死亡状況調査から—」、『岩手大学教育学部教育実践センター紀要』、第14号、21-35頁、2015年3月。
- 10) 麦倉哲・梶原昌五・高松洋子「地理情報システムを用いた津波避難行動の類型化—岩手県大槌町吉里吉里地区を対象として」『日本都市学会年報』Vol.48、289-297頁、2015年5月。